

## エッセイ： ヴォルガの変化から考える

井上岳彦

2009年9月16日、我々調査団は、カザンから20kmほど西に位置するスヴァシユスク(Sviiazhsk)を訪問した。

スヴァシユスクは、かつてモスクワ大公国のイヴァン4世がウグリチからカザンを攻略するために建設した要塞(1551年)である。ロシアがシベリアを領有するきっかけを作った基地であり、カザン一帯での正教布教の拠点でもあった。つまり、スヴァシユスクは、ロシアの東方拡大の象徴のひとつだったといえよう。

このスヴァシユスクは現在、島になっており、2008年に完成した自動車道によって大陸と結ばれている。しかし、イヴァン4世の軍隊がカザンを占領した当時、この要塞はヴォルガ右岸の小高い丘の上にあった。今日のような景観はさほど遠くない昔に出来上がったのである。

島の形成は人の手によるものだった。水力発電所の建設に伴い誕生したダム湖が、スヴァシユスクの400年の景観を変えた原因だった。現在のサマーラ州に建設されたジグリョフスカヤ水力発電所は、1950年に着工、1957年に完成され、2004年に改称されるまで「V.I.レーニン名称ヴォルガ水力発電所」という名前を付けられていた。ダム湖クイブィシエフスコエは、現在もなおヨーロッパ最大の貯水量、ヨーロッパ第三位の面積を誇る。この巨大なダム湖の完成によって、スヴァシユスクは、ヴォルガ右岸の丘からダム湖に浮かぶ島となった。今では、その周囲で人々がボートを浮かべ魚を獲る、のどかな風景が広がっている。

旧称「V.I.レーニン名称ヴォルガ水力発電所」は、スヴァシユスクを島に変えただけでなく、多くの町や村をダム湖の底に沈めもした。スターヴロポリ<sup>1</sup>もそのひとつである。この町の歴史は、18世紀の傑出した政治家・歴史家であるV.N.タチーシチェフが1737年に要塞を築いたことに始まる。ソ連政府による水力発電所建設の決定が公表されたあと、古いスターヴロポリの郊外に新しい集落が形成され、それらを中心に新しいスターヴロポリの町が出来上がった。ソ連の「電化」は、こうしたヴォルガの景観の変化の上に成り立っていたのである。一方で、水力発電所は、新しいスターヴロポリの歴史に繁栄の軌跡をもた

---

<sup>1</sup> 北カフカスのスターヴロポリとの混同を避けるため、しばしば「ヴォルガのスターヴロポリ」、スターヴロポリ・ナ・ヴォルゲ Stavropol' naVolge と呼ばれた。

らした。1965年にトリヤッティ<sup>2</sup>と改称したこの町は、その後、国産車「ラーダ」の製造工場の建設によってよく知られるようになった。

とはいえ、古いスターヴロポリ・ナ・ヴォルゲの町がダムの上に沈んでしまったことは、筆者には残念でならない。まず、スターヴロポリは改宗カルムイク人が移住させられた土地であるからだ。植民の担い手であったコサックは帝国の南方、東方への拡大の中で次第に多民族から構成される軍隊組織へと変貌していくのだが、その先駆けとして必ずと言っていいほど例証される存在がスターヴロポリ・カルムイク軍である。このカルムイク人コサック軍はロシア正教を受け入れた人々から成っていた。しかし、正教に改宗した後もカルムイク人の従来の生活様式を維持し続け、コサック軍のなかでも新しいタイプの集団として18世紀の知識人の注意を引いた。

また、タチーシチェフという歴史的に重要な人物が築いた町だったということも筆者が水没を残念に思う理由のひとつである。ピョートル大帝のときにスウェーデンとの北方戦争で軍功を挙げその後の宮廷で大いに活躍したタチーシチェフは、アンナ帝の時代に政争に敗れ地方に派遣された。彼はオレンブルグ局やアストラハン県知事など南東国境地域の要職を歴任した。また、ペルミや現在のエカチェリブルグといった重要な町を建設したのもタチーシチェフである。スターヴロポリはそうした彼が開いた町のひとつだった。

ところで、ヴォルガには、旧称レーニン名称ヴォルガ水力発電所とそれがもたらした結果のような劇的な変化ばかりではなく、長期の、しかし人間の時間の変化もまた確認されている。筆者がサクトペテルブルグの図書館で少し興味深い事例を偶然見つけたので、紹介しよう。

アンドレイ・レオポルドフという人物が、『雑誌国有財産省』(1842年)<sup>3</sup>のなかでロシア科学アカデミーのある委員会の見解を批判した。彼は、サラトフの著述家で新聞『サラトフ県通報』の初代編集長だった。

その委員会が検討していたのは、「森林の減少がヴォルガの水位にどう影響しているのか？」という問題だった。結局、委員会は因果関係を証明できないとして、さらなる調査、

---

<sup>2</sup> イタリアの自動車企業フィアットとの合弁事業を推進したイタリア共産党書記長パルミエロ・トリアッティ(1893-1964)を記念して付けられた。

<sup>3</sup> «Zhurnal Ministerstva Gosudarstvennykh Imuschestv»のこと。国有財産省は、1837年12月に皇帝直属官房第五部から改組され、国有財産の管理、国有地農民への後見、農業問題の管轄を担った官庁だった。『雑誌国有財産省』は、国有地における農林水産業および手工業の推進・発達を担当した国有財産省第三部によって作成されていた雑誌である。

観察を要すると判断した<sup>4</sup>。

レオポリドフは、この結論の先送りに対して次のように指摘した。

少し前からこの辺り[サラトフ周辺]で言われ始めたのは、ヴォルガがだんだん浅くなっているということです。一部の手工業者や交易商、とくに年配の方々が、じきに水位の減少によってヴォルガの航行が絶えるのではないかと危惧しています。ロシアの半分の産業が集中しているヴォルガの重要性は言うまでもありません。……………(中略)……………

ヴォルガ沿いの森林の減少と並行してヴォルガの水量も減少しました。繰り返し経験が語っているのは、森が川を覆っているときには水が豊富であるということです。それというのも、川となりゆく水脈を日光が干すことなく、[森が]遮るからです。人間がやってきては、斧でもって森を伐採し、川は干からびています。ヴォルガでは何千と似たような事例がありましたし今もあるのです。最寄りの村落で最初の入植者に聞いてご覧なさい。あなたが移り住んだその空き地を見つけたときどんな状態だったのですか、と。どこだろうと返事は、鬱蒼とした森があり川は水に満ちていました、とあなたに言うことでしょう。今や森はなく、深く水に富む川の代わりに、あなたはかろうじて流れている水を見ることでしょう。人間は森を根絶やしにしました。川のまわりに放たれた家畜という、かつては川となった流れをごみで塞いでしまっています。こういうことがヴォルガでもあったのです。<sup>5</sup>……………(省略)……………

([ ]内は、井上による。)

レオポリドフが『雑誌国有財産省』に寄稿した頃、つまり 19 世紀半ばまでは、ヴォルガは「大型平底船の白い帆、河川貨物船をひく曳船人夫の歌、船曳馬の馬方の彫刻を施された舷、流れに逆らって進む木材運搬用大型平底船、キャプスタンの打ち鳴り軋む音、曳船のガチャガチャと鳴る鎖、汽船の外輪水掻きのリズムカルな打ち音」、これらすべてが浑然一体となっており、まだら模様の風景であったという<sup>6</sup>。新たな輸送技術の登場とロシア経

<sup>4</sup> “Vypiska iz protokolov zasedanii Imperatorskoi Adademii Nauk. Zasedanii 17 Maia” // *Zhurnal Ministerstva Narodnogo Prosvescheniia* (SPb.: Imperatorskaia Akademiia Nauk, 1839), Chast'. XXII, Otd.3, SS. 100-102.

<sup>5</sup> A. Leopoldov, “Ob izmeneniiakh Volgi v Saratovskoi gubernii” // *Zhurnal Ministerstva Gosudarstvennykh Imuschestv*, (SPb: 3-i Departament Ministerstva Gosudarstvennykh Imuschestv, 1841), SS. 30-33.

<sup>6</sup> K.V. Nedialkov, “Volga – velikaia golubaia transportnaia magistral' Rossii” // *Rogina* (M.: Izdatel'stvo “Rogina”, 2003), №7, SS. 54-55.

済を牽引するヴォルガ水運の根幹であるヴォルガそのものの変化を感じ取ったレオポリドフは、サラトフの古老たちの声を拾い、砂州の変容や粘泥の堆積といった具体的な説明を加えながら川の現実の問題を訴えた。

レオポリドフが寄稿した国有財産省は、1842年1月から森林の育成・管理のために全国の国有林を6の検査局に分けて監督させた。第五検査局に、コストロマ県、ニジェゴロド県、カザン県、ヴァトカ県、ペルミ県、オレンブルク県が入り、サラトフはペンザ県、アストラハン県、カフカス地方、グルジア・イメレチア地方、カスピ地方とともに第六検査局に入った。この整理の仕方は、当時まだサラトフがカフカスと同様のレヴェルで入植対象地区だったということの意味している。

テレク・コサックと北カフカス地方の関係について研究した T.バレットは、入植活動と地域の生態環境の変化について著書の一章を割いた。地理学者 D.L.イワノフの言葉を引用して、入植と森林伐採の結果起こった(カフカス地方の)スターヴロポリ地域の土壌侵食について指摘している。イワノフを以下に孫引きさせてもらおう。

古老たちによると、その村はおそらく「 Cholnoleskoe」と名付けられていた。なぜならこの村落ができたとき、ここではトムズロフ川の岸辺にずっと落葉樹ばかりの大きな森が生い茂っていたからである。その森では野生のブタやヤギが多数生息していた。シカやクマさえおり、カフカス山脈の森からの通り道をつくっていた。我々の時代にはその森の痕跡すら残っていない。

このようにイワノフが指摘したのは、1886年のことである。イワノフが指摘するように、開拓と燃料確保にとまなう大規模な森林破壊の結果、土質の劣化が引き起こされた。川は干上がり土地は乾燥し、氾濫と積泥が頻発したという<sup>7</sup>。

サラトフの文筆家レオポリドフの「ヴォルガ」と地理学者イワノフのスターヴロポリ地方についての文章の間には半世紀弱の時間があるのだが、ふたつの引用の類似は、管轄官庁の国有財産省が1850年代から積極的に打ち出した森林保護政策が有効に成果を上げていなかったことを明らかにしている。サラトフとカフカスという同じ検査局が担当する地域で情報がうまく共有されることがなかったことは国有財産省という組織の大きな欠陥を示唆していよう。

---

<sup>7</sup> Barrett, Thomas M. *At the Edge of Empire: The Terek Cossacks and the North Caucasus Frontier, 1700-1860*. (Boulder: Westview Press, 1999), pp. 66-67. 次の文献を参照のこと。D.L. Ivanov, “Vliianie russkoi kolonizatsii na prirodu Stavropol’skogo kraia,” *Izvestiia Imperatorskogo russkogo geograficheskogo obschestva* 22, no.3 (SPb, 1886), 224-254.

川の水は常に流れ、留まることはない。水は、雨雪が集まり流れとなって、その途中で人や動植物のなかを通過したり工場用水として利用されたりしながら、終いに気化して空中を漂い、また雨雪となって大地に戻る。「川」という語は、水の循環の地表における姿を切り取ったものに過ぎないが、今回のヴォルガでの調査から、筆者はこの川が周囲を巻き込むその力について改めて考えさせられた。本エッセイでは、実際に訪れたスヴァシユスクの歴史的変容から論を始めて、入植者による森林伐採とヴォルガ川について、森林を保護すべき官庁についてと考察をつなげた。もちろん、より精緻な議論のためにはより綿密な研究が必要なことは言うまでもないが、「ヴォルガ川」という分析視点は様々な可能性を筆者に与えてくれた。